ヘルパー日誌 (4)

きいてください　私たちの仕事のこと

福井医療生協　笠原恵美子

事例

地域の組合員さんが気づき、支えた独居男性

今回は、数年前に妻と死別し、独りぐらしが難しくなった八〇歳の男性の事例です。

「ひとり暮らしで最近、ちょっとたいへんなAさんの相談にのって」という、ある組合員さんの電話から、私たちのかかわりがはじまりました。「ときどきカレーを作って持っていくと、とても喜ばれる。普段はふりかけご飯くらいしか食べていないみたい」というのです。

生協のケアマネジャーが、Aさん宅を訪問しました。尿の臭いがひどく、家の中も散らかっていたので、すぐ市内在住の息子さんに連絡し、介護保険の申請とサービスの説明に入りました。息子さんたちもはじめは深刻に思っていなかったようでしたが、家のようすに驚き、ヘルパーの訪問が始まるまでに家中にたまっていたゴミをトラック二台分も始末したそうです。

家に入ってわかった

ヘルパーが訪問を始め、家に入ると、トイレまでの廊下に新聞が敷き詰められていました。トイレが間に合わないようです。尿臭も強く、寝室には夏だというのにヒーターをつけ、失禁で濡れてしまった畳を乾かしておられたのは、ショックでした。

Aさんは、口数少なく、ニコっと笑ってうなずくか、意に添わない時には呼びかけにまったく反応しないなど、意思の疎通がむずかしい方でもありました。身動きもせず黙りこんだ時など、対応に悩むこともありました。

「できないこと」もどんどんわかってきました。

食卓にセットした食事は食べ、空いた食器を流し台まで持ってゆけるのに、冷蔵庫に入れたものは、メモをしても手をつけません。訪問するといつもパンツ一枚の姿です。ズボンを脱げても履けないようなので、冬に入ってからが心配でした。お風呂も着替えも一人ではできなくなっていました。

家族に囲まれ和やかな顔が

家族も、受診に関わるようになると、お父さんの体調などにも関心を持つようになりました。息子のお嫁さんとも電話で相談できるようになり、関わりも増えました。

初めての冬は、Aさんが施設入所を拒否されたため、火事ややけどを心配しながら、私たちの訪問奮闘記を続けました。

しかし昨年からAさんは暖房機器が扱えなくなりました。家族と相談し、冬の間は生協のショートステイに入所すると決められました。ヘルパーステーションが同じ建物にあるので、ヘルパーはいつでもAさんに会えます。

家族がそろって面会に来たときにAさんが和やかに過ごされているようすは、家では見られなかった一面です。

■

地域の組合員さんの気づきから、私たちが関わり、独居の困難になったAさんの生活を支えることになって、家族、地域、事業所のつながりと輪がみえた貴重な事例でした。

ほっと介護 (77)